



MUSASHINO Vol. 132 *for* TOMORROW



巻頭

ベートーヴェンの記念年に寄せて

ミハエル・ラーデンプルガー

(ボン・ベートーヴェン・ハウス元館長)



謹賀新年

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井直敬

令和初の年明け、皆様にはご健勝にて佳き初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年は、5月の今上天皇ご即位以降慶祝の行事が続き、国民は改めて新しい時代への希望と期待を抱く一方で、全国各地が記録的な台風や風水害による甚大な被害を被り、明暗相半ばする年越しとなりました。新年を平穩に祝うことができない被災者の方々が、未だ多数おられる現実に関心と痛みを覚えます。

武蔵野音楽大学では平成29年春、江古田キャンパスに近代的な校舎を建設し、従前2つのキャンパスに分散して行っていた教育研究を、ここに統合してから早や3年が経ちました。学生諸君の日々の生活もすっかり落ち着き、学修意欲は目に見えて向上しています。それぞれが特色ある大中小のコンサートホール、複数のリハーサルホール等を完備したことで、学生諸君自身が企画する演奏会とともに、公開での演奏を体験する機会が飛躍的に増加しました。附属高校の生徒たちも、これら施設を活かして成果を挙げています。

さて、このような状況の中「単位の実質化」の一環として、本年度は各学科目に共通する評価基準を導入しました。また、修士課程の論文執筆マニュアルを検討するなど、今後とも成績評価の客観性・公平性について、引き続き検討を重ねてまいります。一方、この機会に「時間厳守」を生活規範とする本学として、授業への出席状況を改善するために遅刻管理を実施していますが、その効果は目に見えて表れており、今後更に徹底を図ってまいります。

キャンパスの統合を果たし、新校舎の整った施設・設備の中、学部新生から大学院生までが共に過ごすことで、学生諸君も緊張感をもって学修に取り組み、これが教育方針である「音楽芸術の研鑽」と「人間形成」に通じるものと考えています。同時に、日常の学校業務について効率化が図られ、経営上も大きく反映するものと思います。

本学の建学の精神は「〈和〉のこころ」であり、「和」とは協調であっても同調ではありません。多様性が求められる今の社会で、一人ひとりの「個」を大切に、知識の取得を知恵に変えることができる能力の涵養を目ざして、日々地道な努力を続けてまいりますので、皆様のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。

ベートーヴェンの 記念年に寄せて

ミヒャエル・ラーデンプルガー
(ボン・ベートーヴェン・ハウス元館長)



ミヒャエル・ラーデンプルガー
Michael Ladenburger

1953年生まれ。音楽学者。ラーデンプルガー博士はウィーン大学で音楽学(主専攻)と美術史(副専攻)、ウィーン音楽大学でオルガンを学んだ。1985年には、ユスティン・ハインリヒ・クネヒト(1752-1817)に関する論文で音楽学の博士号を得ている。1984年からボンのベートーヴェン・ハウスに勤務、ベートーヴェン・アルヒーフ研究所員を経て、1991年から2018年の定年退職までミュージアムとコレクションの管理責任者、ベートーヴェン・ハウスの館長を歴任した。数多くの批判校訂版やファクシミリ版の編集に携わるほか、ベートーヴェンやハイドン、オルガン建造やオルガン音楽に関する多数の出版物がある。ベートーヴェン・ハウスのコレクションはベートーヴェンに関する世界最大の、そして最も多様なコレクションであり、博士は特に多数の特別展や目録で、ベートーヴェンの生涯と作品に関する多くの面をオリジナル筆写資料に基づいて明らかにした。彼は特に自筆譜、同時代の楽器、当時の演奏実践、並びに作曲家の精神世界の探求に関心を持っている。1999年11月に武蔵野音楽大学で創立70周年記念行事の一環として、ベートーヴェン・ハウスおよびベートーヴェンのピアノ・ソナタに関する講演を行い、2003年には《月光ソナタ》のファクシミリ版による筆写譜選集を武蔵野音楽大学と共同出版した。なお、今回の講演はラーデンプルガー『ベートーヴェンへの道—正しい楽譜、楽器、演奏解釈に向けて—』(武蔵野音楽大学、2002)としてまとめられている。

昨年、武蔵野音楽大学は創立90周年、ボンのベートーヴェン・ハウスは創立130周年を迎えました。そして今年にはベートーヴェン生誕250周年が世界中で、とりわけベートーヴェンの生家で祝われることになるでしょう。武蔵野音楽大学とベートーヴェン・ハウスとの協力関係は今では30年以上も続いていますから、こうした記念の機会にベートーヴェン研究を振り返ってみることは、時機を得たことと言えるでしょう。

ベートーヴェン研究の歩み： スケッチ帳への注目

ベートーヴェンは早くから音楽研究の対象でした。ベートーヴェンとの取り組みは音楽学の、特に伝記や文献に関して、最も古く、中心的な領域の一つでした。喜ばしいことに、ベートーヴェンからは多くの資料が伝えられているので(たいていの資料は1800年以前のものであり、1821年の会話帳などは失われてしまっていますが)、ベートーヴェンにおけるスケッチ研究は、まさに音楽学の典型的分野なのです。すでに150年前に、自身が良い出来栄の作曲家でもあったグスタフ・ノッテボームのような研究者は、およそ5000という莫大な数が残されているスケッチ帳のページ

を手掛かりにして、ベートーヴェンの作品の生成過程の手がかりをつかもうとしました。その際に関心は、私達にずっと以前から知られたベートーヴェンの完成された作品ばかりではなく、スケッチや例えば難聴のために最後まで作曲しなかった作品についての、部分的にはかなり進んだ構想にも向けられました(例えばベートーヴェン自身がもはやソリストとして出演できなかった、ピアノ協奏曲第5番の初演の4年後に作曲された二長調のピアノ協奏曲)。前々から特別の注意を呼び起こしてきたのは、ベートーヴェンが家の外で(レストランや野外で、全く思いつくままに鉛筆でアイディアを書き込んだポケットスケッチ帳)、あるいはそれに引き続き自宅で使った(ベートーヴェンがこれらのアイディアをたいていインクでさらに仕上げた大判の)スケッチ帳です。その際に、特別の注意が新しい音言語を持つ晩年の作品(特にOp.127(第12番)以降の弦楽四重奏曲)に向けられたのは、もっともなことでした。

研究と演奏に役立つ ベートーヴェンのスケッチ

歴史的音楽学全般そして特にベートーヴェン研究の多くは、厳密に確認可能な、学問的判断基準を必要とし



▲ 図版1: ピアノ・ソナタ嬰ハ短調 Op.27-2 第3楽章のスケッチ稿 SV333 (ファクシミリ版 p.53) (武蔵野音楽大学所蔵)



▲ 図版2: ピアノ・ソナタ嬰ハ短調 Op.27-2 第3楽章のスケッチ稿 SV333 (ファクシミリ版 p.54) (武蔵野音楽大学所蔵)

す。しかし(かなりの領域で避けがたい)直感的アプローチにも重要性があることを過小評価してはなりません。ベートーヴェンのスケッチは、簡単に読むことはできません。彼はそれを自分自身のために書きました。ですから、解釈が必要なのです。符頭はしばしば書かれていなかったり、とてもあいまいに記されているので、これらのスケッチは音楽的に「正しく読まれ」なければなりません。その際に、専門家ですら、全く異なった結論に達することがあります。もちろんこうした学問的研究と並んで、ベートーヴェンの手稿譜の取り組みは演奏家にとって非常に重要です。それは手稿譜が意図された譜面についてばかりではなく、その表現についての情報の宝の山だからです。専門家でない者が多くのことを理解することが出来ないとしても、作曲現場への一瞥は印象を後に残すことでしょう。今日の電子化の時代には、ベートーヴェンの手稿譜を研究することは、かつてないほど簡単になりました。2004年から、ベートーヴェン・ハウスにはデジタル・アーカイヴがあり、コレクションにおけるすべての重要な対象を包括しています。その間に、喜ばしい事には、ベルリン国立図書館プロイセン文化財、ニューヨークのジュリアー

ド音楽学校、ロンドンのブリティッシュ・ライブラリー、そしてパリのフランス国立図書館が、彼らのベートーヴェン資料の少なくとも一部を、自由に閲覧できるようにインターネットで公開しました。価値の高いファクシミリ版の制作も、今日ではやはりずっと簡単で、費用もそれほど掛かりません。2002年に武蔵野音楽大学とボンのベートーヴェン・ハウスがピアノ・ソナタ嬰ハ短調 Op.27-2 (《月光》)に関して、すべての筆写楽譜(自筆譜とスケッチ、その中の1つは武蔵野音楽大学の蔵書)並びに初版の価値の高いファクシミリ版を出版し、ベートーヴェンの生家で国際的な訪問者に対して特別展も開催したことは、非常に素晴らしく、意義深い共同事業でした(ついでながら、《月光ソナタ》という別名は作曲者によるものではなく、不適切でロマン的な過大解釈であることを指摘しておきます)。この有名なソナタには、残念ながらごくわずかなスケッチしか残っておらず、しかも有名な第3楽章のスケッチです。武蔵野音楽大学所蔵のスケッチは、作曲の後の段階からのものです。これはいわゆる経過スケッチ、つまり比較的長い関連した構想であり、幾つかの短いアイデアではありません(図版1、図版2)。

筆写譜は 作曲家のポートレート: ディアベッリ変奏曲

ベートーヴェン・ハウスはさらに以下の曲の筆写譜をファクシミリ版として出版してきました。ピアノ・ソナタ Op.28 (第15番)、Op.53 (第21番)、Op.90 (第27番)、Op.101 (第28番)、チェロ・ソナタ Op.69 (第3番)、交響曲第6番 (Op.68)、ゲーテの詩による《6つの歌》(Op.75)、(おそらく正しくない《エリーゼのために》という標題で知られた)ピアノ曲 (WoO.59)、そしてロベルト・シューマンの《マリーエのためのピアノ曲集》です。特に啓発的なのは、《アントン・ディアベッリのワルツによる33の変奏曲》(Op.120)の自筆譜です(図版3)。これは2009年にベートーヴェン・ハウスのコレクションに手に入れることができ、直ぐにファクシミリ版として音楽界に提供しました。この自筆譜からは、作曲家としてのベートーヴェンの見解、そして彼の仕事の仕方について、特に深く洞察することが出来ます。作曲家は、出版者で、この主題を作曲したアントン・ディアベッリが「祖国音楽家同盟」という名を与えた他の49名の作曲家、ピアニスト、ディレタント(その中にはフランツ・シューベルト、11歳のフランツ・リスト、そしてリストの師カール・

チェルニーが含まれます)の列に加わることを断りました。ベートーヴェンは、一見するとあっさりしたこの主題にどのような潜在能力が潜んでいるのか示そうとし、彼の作曲能力で全力を尽くしました。そのことは筆写譜からも読み取れます。ベートーヴェンが剃刀で行った何百もの訂正がありますが、それはその後で修正された見解を記譜することが出来るためでした。手稿譜は、最も良い解決を巡る絶えざる戦いを示しています。これは清書譜のはずですが、それでも多くの箇所ですら思いのままに衝動的に書かれているので、仕事上の作曲家の心の中の状態(例えば図版に見られるようにインク壺をひっくり返した時のような)、そしてまた彼の音楽のイメージ(例えば緊張感を表すアーチ形)も読み取ることが出来ます。注目に値するのは、このツィクルスが若干の変奏曲の中でヨハン・ゼバスティアン・バッハとヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトに敬意を表し、「メヌエットのテンポで」終わることです。このメヌエットは、宮廷音楽家としての青年ベートーヴェンが、場合によっては舞踊のために演奏しなければならなかったものとは全く異なっています。この過去との意識的な関

連付けで、これまでの40年間における作曲家としての自分の大変大きな進歩を自信をもって、誇らしげに示そうとしたのです。ベートーヴェンの筆写譜は、作曲家ベートーヴェンの最も良い「ポートレート」とみなすことが出来るでしょう。

友人に宛てた ベートーヴェンの 新発見の手紙

時々ベートーヴェンの個性の知られていない面が、別の文書に発見できることもあります。これは、今まで全く知られていなかったベートーヴェンの手紙に、特によく当てはまります。これは2018年にベートーヴェン・ハウスがコレクションに入手することが出来たものです。ずっと以前から、ボンにおけるベートーヴェンの青年時代は十分に研究されています。ボンではフランス革命の勃発前に、まだ啓蒙主義の理念が知識階級の人々の心を動かしていたことが知られています。ボン最後の選帝侯も、その考え方を十分に共有し、さらにそれを奨励さえしました。ベートーヴェンの多くの友人たち、教師、音楽家仲間は、この知識階級に属していました。ベートーヴェンの特徴づけ

ている精神的態度は、ボン出発の3年後、サンクトペテルブルクに住む青年時代の友人ハインリヒ・フォン・シュトルーヴェに充てた手紙に、雄弁に表現されています。私達は1795年9月17日にウィーンで書かれたこの手紙(同様にファク



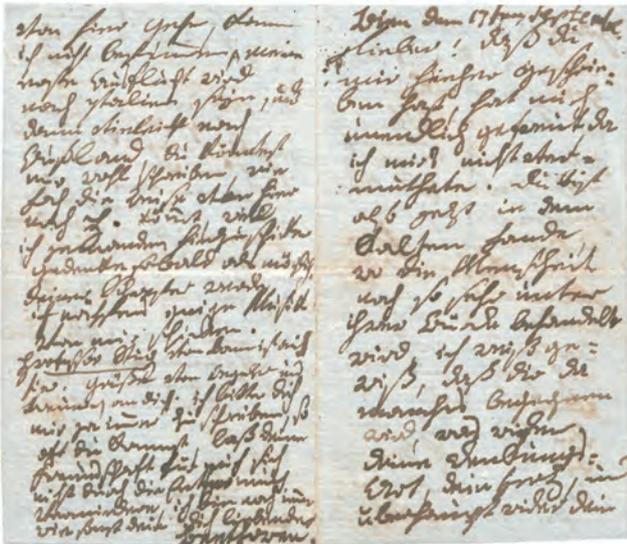
▲ 1960年にドイツ連邦共和国 ボン市より
本学に寄贈されたベートーヴェン像

シミリ版もあります)を、サイズからはベートーヴェンの全ての手紙の中で最も小さいとしても、「偉大」と呼ばなければならないでしょう。この手紙は、開いた状態で、8×9.3cmしかありません。このとても小さなサイズは、おそらくそうするとより安くなる郵便料金のため、または親切なメッセンジャーによる割引のために、引き起こされたのでしょうか。この手紙の内容は、もちろん平均余命が今日よりもはるかに短かった時代ですが、ベートーヴェンがすでに24歳にして、死や人間の権利と真剣に向き合っていたことを示しています。シュトルーヴェは、すでに彼の父親と同様にロシアで勤めていました。彼の母親は、この手紙の直前に亡くなっています(図版4)。

親愛なる友よ！君が当地の僕に手紙をくれたことは、僕をこの上もなく喜ばせました。僕は、そんなことを考えてもいなかったからです。君は人々が大変品位なく扱われる冷たい国にいます。きっと君はそこで君の考え方、君の心、そしてそもそも君の感情すべてを逆なですることとしばしば出会っていることでしょう。人格が認められる時機は、やがて来ることでしょう。いくつかの土地では、そうした幸せな時が近づいて来るのを見るでしょう。しかし全般的には、おそらくもう1世紀が過ぎるまで、見る



▲ 図版3: 《ディアベリ変奏曲》(Op.120)の自筆譜 第32変奏
(ボン・ベートーヴェン・ハウス所蔵)



▲ 図版4: ハインリヒ・フォン・シュトゥルーヴェ宛の手紙 (ウィーン、1795年9月17日) (ボン・ベーターヴェン・ハウス所蔵)

て微笑みながら穏やかに彼岸を夢見することをイメージするならば、死をまさに悪しざまに言うことはできません。

僕のこのでの生活は、まだ良いです。僕は自分が設定した目標に近づいています。僕がここからいつ出るか、決めることはで

きません。僕の最初の小旅行はイタリアでしょう。それから、ひょっとするとロシアかも知れません。できるだけ早く、使いの者を出しますから、当地からベテルブルクまでの旅の費用を教えてくださいませんか。君のお姉さんには近々僕の音楽を少しお送りしましょう。

ボンのシュトゥップ教授も当地に滞在しています。ヴェーゲラーと

プロイニングからも君によろしくとのことです。君と僕との友情が、遠く離れていることによって減らないように、できる限り頻繁に手紙を書いてください。

いつも変わらず君を愛する
ベーターヴェン

「冷たい国」とは、ロシアのことです。ヨハン・ライナー・シュトゥップは早くも24歳で、ボンの選帝侯大学で法律百科全書とローマ法の教授に就任しました。フランツ・ゲーアハルト・ヴェーゲラーとシュテファン・フォン・プロイニングは、ベーターヴェンの青年時代における最も親しい友人で、フランス軍によるボン占領のために、やはりその頃ウィーンで生活していました。さらに、社会批判的なウィーンの脚本家ヨハン・ネストロイは、1846年に人権問題をこう表現しています。「一体イギリス人たちはなぜムーア人を白人に数え入れることに至らないのか」

(訳: 寺本まり子 本学特任教授)

ことはないでしょう。

君が母上の死から受けた苦しみは、僕も非常に同感することが出来ます。僕はほぼ2回、僕の母と僕の父が亡くなった時に、同じ経験をしたからです。めったに見いだせないほど調和のとれた全体から一人の構成員が無理やり連れ去られるのを見ると、悲しまない者はいないでしょう。しかし死にゆく者が逆に勝利し、死に対し

音楽の万華鏡 48

ごせちのまい
五節舞

令和元年の最大のニュースは、天皇の代替わりであろう。普段は日本の伝統や歴史に無関心でも、一連の儀式の報道から、日本の歴史の長さや重さをあらためて認識した方々も多いのではないだろうか。これらの儀式を彩った音楽が、日本古来の雅楽である。毎年宮中では新嘗祭と

いって、その年に収穫した穀物を神に捧げて感謝し、翌年の五穀豊穡を祈る儀式を行っている。天皇が即位後最初に行う新嘗祭を大嘗祭という。大嘗宮という特別な建物を作り、ほの暗い明かりの中で厳かに行われる神事は、大々的に報道され、私たちの記憶にも新しい。

大嘗宮の儀が行われたあと、「大饗の儀」の宴会が行われた。報道では、お供え物のお下がりのお膳の中身とともに、この宴会で舞われた華やかな舞楽も報道されていたが、中々もどき目を引いたのが《五節舞》ではないだろうか。琴を弾く天武天皇のもとに舞い降りた天女を模し

たものという伝説がある。長い髪をおすべらかしに結び、十二単に身を包んだ舞姫たちが、手に檜扇を持ち、男声斉唱する《大歌》にのせて優雅に舞う姿は、さながら平安絵巻を見るようである。

本学のミューズ・フェスティバルで、大饗の儀の3週間前に、この舞を模した女舞が雅楽クラスを履修する学生たちによって舞われた。おすべらかしも十二単もなかったものの、国風歌舞の装束に準じた純白の袍と袴に身を包み、金色の天冠を付けた舞姫たちは何にもまして清楚で美しかった。和琴、笏拍子、龍笛と筆簾の伴奏で歌われた男女斉唱の《大歌》にあわせて、舞台をゆったりと舞い巡る。舞姫たちが手にした檜扇は手作り、檜の薄板ならぬ厚紙を用いて作られていたが、美しい飾り紐も本物を模してとりつけられており、舞の優雅な動きを際立たせていた。令和元年のミューズ・フェスティバルならではの、ひとこまであった。



薦田治子(本学音楽学教授)

キャンパス全体を調律し
多彩な交流を促進する中庭広場

「リストプラザ」

(文：福井直昭 副学長)

ランチをしながら友人と語り合う人やひとり読書をする人、音楽を奏でる人やそれを立ち止まり聴き入る人、そんな思い思いに人々が集まるヨーロッパの街をイメージした賑わいのある広場がここに 있습니다。単に敷地中央に位置するというだけではなく、キャンパス全体を調律する「核」として創造された中庭広場「リストプラザ」を、福井直昭副学長がご紹介します。

サンクンガーデンによってかたちづくる音楽の街

江古田キャンパスのエリアは建築基準法により高さが20mを超えてはならないという制限があり、周囲は更に高さ制限が厳しい戸建て住宅の多い環境です。そこに音楽大学という複合的な施設を建てるには、どのような方法がベストか——キャンパス全体のマスタープランを立案するにあたり、設計を担当した(株)大林組との様々な模型や概念図を使った協議の結果、2012年夏に決定したのが“サンクンガーデンによってかたちづくる音楽の街”というコンセプトでした。



▲キャンパスの中心を掘り下げ配置した広場は、地下1階まで十分に陽光や風を取り入れ、立体的な景観を演出しながら、豊かなキャンパスの環境を創り出している

サンクンガーデンとは、sink(沈む)の過去分詞形「サンクン sunken」と庭を意味する「ガーデン garden」を組み合わせたものであり、地盤面より掘り下げたところに造った広場や庭園のことです。ニューヨークにある「ロックフェラーセンター」が先駆的かつ代表的な例ですが、近年日本でも都市部において、人々が集う地下の開放的な空間として盛んに建築設計に取り込まれており、オフィスビルやホテルなど、様々な用途での事例(東京オペラシティ、新宿アイランドタワー、新宿三井ビル、恵比寿ガーデンプレイス等)が見られます。



▲天候、時間、見る距離・角度によって千変万化する唯一無二のタイルが、広場を取り囲む建築群の表情に変化をもたらしている



▲人々が行き交い、集い、新しい交流を生み出す場所として広場が機能することで、新たな都市型キャンパスの姿が実現している



▲周囲を異なるデザインの建物に囲まれた空間。プラザによって個性ある建築群が調律され、ハーモニー(=建学の精神「和」のこころ)を奏でている

キャンパスは、閑静な住宅街に囲まれた立地であるため大きな音を外部に出せず、前述のような高さ制限があるため地上は5階までしか建てられない——そこで考えたのが、建物を敷地周囲に配置し、地下に中庭を掘り込むというアイデアです。校舎群が防音壁の機能を果たすことにより周辺環境への影響を最小限におさえつつ、キャンパスの中心に配置したサンクンガーデンにより地下1階まで十分に陽光や風を取り入れ、豊かなキャンパスの環境を創り出す——こうして、地下1階から地上につながり、立体的な景観を演出する中庭広場(サンクンガーデン)を核として、キャンパス全体が構成されることになりました。賑わいの場は、周りの環境に配慮してサンクンガーデンを中心として内側に集約した構成にし、音楽大学としての多様な諸機能を“外部に適度に閉じつつ、中庭に開放的に開く”わけです。

多様な個性がひとつのかたちに融合していく

本誌Vol.129の「外観デザイン」の回でご説明したような「各室内の多様な性能(光、遮音、響き)を素材とデザインに直接的に反映させる」という隠れたルールにより、中庭広場を取り囲む建物は、それぞれ教室、ロビー、図書館、ミュージアム、レッスン・練習室、レストランなど機能毎に分化することで、特徴的な外観をまとっています。これらの個々の要素は中庭広場によって調和が図られ、キャンパス全体が空間豊かなひとつの街のような景観になっています。内部構成が自然と外観デザインに反映されつつ、多様な個性がひとつのか



▲広場は学生のアクティビティを活性化させている。未来の音楽家たちが共に語り合い、そして響き合う

ちに融合していく——すなわちキャンパスに個と全体の調和(ハーモニー=建学の精神「和」)をもたらすこととなります。言い換えれば、プラザによって個性ある建築群が調律され、ハーモニーを奏でるわけです。

周囲を異なるデザイン

の建物に囲まれた空間は、あたかもヨーロッパの広場のように、ある時は憩いの場、ある時は大階段を客席に見たてた屋外イベント空間となります。人々が行き交い、集い、新しい交流を生み出す場所としてこの広場が機能することで、新たな都市型キャンパスの姿が実現しています。



▲思い思いに人々が集まるヨーロッパの広場のよう、ある時は憩いの場、ある時は大階段を客席に見たてた屋外イベント空間となる

コミュニケーションの場に相応しい カツラがもたらす季節感

本誌Vol.127の「ランドスケープデザイン」の回でもご紹介したとおり、多種多様な植物が植えられたキャンパス外周部とは異なり、リストプラザは舗装材(タイル)と高木のみの構成のシンプルに洗練された広場としました。高木には、季節感をもたらすことができる落葉樹の



▲舞台的な小段を設けた西側階段:「見る・見られる」の関係性が生まれることを期待したステージは、学園祭等、様々なイベントで活用されている

中でも、凛とした垂直の幹やコミュニケーションの場に相応しい緑陰と陽だまりをつくり出す柔らかな葉のカツラを選びましたが、地下および地上の広場、ブリッジ、プラザを囲む建築群に統一感をもたらすため極力同じ姿のカツラを選定し、植樹しました。プラザに下りる大階段の踊り場にもカツラを植えていますが、これも緑により上下の空間を立体的につなげる工夫です。西側の階段足元には、様々なイベントに活用できるように舞台的な小段を設け、「見る・見られる」の関係性が生まれることを期待しました。

アトリウム(エントランス)を抜け、学園創業者福井直秋像がある1階テラスからC棟をつなぐリストプラザ上部に掛かるブリッジは、中央部の1本のコンクリート製の柱で支えられています。この柱やプラザ周辺の柱は、周囲の高木(カツラ)と応答するため、杉板を型枠として用いコンクリー



▲アトリウムを抜けた1階テラスにある学園創業者 福井直秋像



トを打設する「本実型枠コンクリート工法」により天然の杉板の木目が転写されており、無機質になりがちなコンクリートが表情を見せています。

◀ プラザ上部のブリッジを1本で支えるコンクリート製の柱。周囲の高木と応答するため、天然の杉板の木目が転写されている



▲ 朝日と紅葉が織りなす風景や、雪に彩られた夜景など、四季折々の表情が楽しめる

活気あるキャンパスを表現する床タイルのアクセント

床タイルは無彩色で構成していますが、「人と自然が交わる活気あるキャンパスの中心」を表現できるよう、そこに白、黒、グレーという濃さの異なる3色でつくったアクセントカラーのパターンを加えました。整形なプラザに「柔らかさ」を与えるため、パターンは形は広場に植栽されたカツラの木陰をモチーフとし、樹木がもたらす実際の影とのバランスを考えて配置しています。さらにパターンの配色にも工夫があります。プラザを囲むC棟、S棟、E棟の床に与えられた各々別のアクセントカラーが三方向から徐々にプラザ側に染み出していくイメージで、その3色がプラザ中央に近づくにつれ均等に絡み合い交わっていくことにより、「交流」を意図しました。「内と外との連続性」も狙ったこの工夫は、地下1階および地上1階レベルの両方で展開しています。

命名の理由——学生が心豊かな人格を形成し巣立っていくことを期待して

芸術家というものは、ともしれば自分の殻に閉じこもって孤立した存在になりがちなのか、歴史に名を残す大作曲家にもそのような内向的なタイプが多くみられました。それに反し、当代最高のピアニストとして欧州を席卷したスーパースター、フランツ・リストは、社交界では常にその中心人物となり交友関係をひろげました。作曲家はもちろん多くの詩人、

文筆家、画家らから影響を受け、それを自分の芸術の完成のために役立てました。また若い芸術家に対しては常に好意をもって接し、援助を惜しみませんでした。さらに音楽学校を設立したり、大災害の被災者を救援するためのチャリ



◀ 「人と自然が交わる活気あるキャンパスの中心」を表現した床タイルのアクセント

ティー演奏会を始めたりもしました。そのようなリストの人間力を踏まえ、人々が行き交い、集い、新しい交流を生み出す場所としてこの広場、およびキャンパス全体が機能することで、武蔵野の学生が心豊かな人格を形成し社会に巣立っていくことを期待して、「リストプラザ」と命名しました。

なお、9ページで詳述されているよう、2019年10月24日にハンガリーのジュール・フィルハーモニー管弦楽団より、本学の創立90周年を祝しフランツ・リスト像が寄贈されました。像は、本年秋頃にリストプラザ南西部に設置され、地上1階の創立者像と共に学生の活動を見守っていきます。

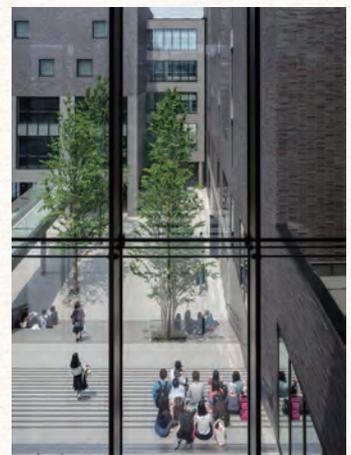


▶ 本学の創立90周年を祝し、ハンガリーのジュール・フィルハーモニー管弦楽団より寄贈されたフランツ・リスト像

* * * * *

それぞれの建物から音と人が広場へと自然に集まり、また各建物からはガラス越しに広場を見渡すことができる——リストプラザがステージ、周りの建物が客席のようです。広場に集まる未来の音楽家たちが共に語り合い、そして響き合うことで、広場を取り囲む建築群の表情の変化とともに、オーケストラのような風景を創りあげています。

リストは以下のような言葉を残しました——「未来という無限の王国に向けて、できるだけ遠く槍を投げることだ」。学生の皆さんには、江古田キャンパスという実践的な音楽教育の場で、音楽と夢を十分に奏でてほしいと思います。



▲ それぞれの建物から音と人が広場へと自然に集まり、また各建物からはガラス越しに広場を見渡すことができる——リストプラザがステージ、周りの建物が客席のようである



武蔵野音楽学園創立90周年記念イベント開催報告

昨年2019年は、1929(昭和4)年の本学園創立から90周年の節目の年であり、記念イベントとして10月から12月にかけてジュール・フィルハーモニー管弦楽団演奏会、ミヒャエル・ラーデンプルガー特別公開講座(P11参照)、本学管弦楽団合唱団演奏会が行われました。

ジュール・フィルハーモニー管弦楽団演奏会

10月24日、本学ベートーヴェンホールにてハンガリーの名門オーケストラ、ジュール・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会が開催されました。本公演は本学園の創立90周年に加え、日本とハンガリーの外交関係開設150周年、同楽団の創立125周年を記念して行われ、満員の客席には各国大使、外交官を始め、海外の方も多く詰めかけました。

✦ フランツ・リスト像除幕式

演奏会に先立ち、舞台上ではジュール・フィルから創立90周年記念のお祝いと友好の印として武蔵野に寄贈されたフランツ・リスト像の除幕式が厳かに挙行されました。ハンガリー国特命全権大使 ノルバート・バラノビチ氏、ジュール・フィル監督ゲーザ・フーケ氏、同芸術監督であり武蔵野の

名誉教授でもあるカールマン・ベルケシュ氏からご祝辞をいただいた後、本学の福井直昭副学長も登壇し、4氏により像の幕が取り除かれて凛々しい表情のリスト像がお披露目されました。本像は本年秋、リストプラザに設置されます。

また副学長には長年の交流に貢献したとして、ソウル五輪体操金メダリストでもあるジュール市長 ジョルト・ボルカイ氏から「ジュール市シルバー記念メダル」も贈られました。副学長は感謝の言葉とともに、ハンガリーと武蔵野の長きにわたる親密な関係、リストの人となりから新キャンパスの中庭を「リストプラザ」と名付けたエピソードなどを語られました。

✦ ハンガリー尽くしの演奏会

プログラムは、ハンガリーが誇る作曲家の作品をラインナップ。1曲目はバルトーク「管弦楽のための協奏曲」。休憩をはさんで2曲目はリスト「交響詩《レ・プレリュード》」、そして最後はこの日一番の大編成となったコダーイ「組曲《ハーリ・ヤーノシュ》」。いずれの曲でもハンガリーのオーケストラならではの情感豊かで迫力満点の



▲(左から)福井直昭副学長、カールマン・ベルケシュ芸術監督、ノルバート・バラノビチ特命全権大使、ゲーザ・フーケ監督の4氏が綱を曳き、フェレンツ・レポー氏制作によるリスト像が公開された



▲福井副学長に、ジュール市長からの「ジュール市シルバー記念メダル」と証書が授与された

力強い演奏が披露されました。

指揮をしたカールマン・ベルケシュ先生は武蔵野でも長きにわたり指導されており、また武蔵野出身の演奏家が数多く同楽団のメンバーとして活躍しています。この日も6名の卒業生が舞台上に立ちました。出演した卒業生に公演前にお話を伺うと、「久しぶりの母校、久しぶりのベートーヴェン

ホールで自分の成長を見て貰えるのが嬉しい」、「学生時代にハンガリー演奏旅行を経験し、今回はハンガリーのオケの一員として武蔵野で演奏できて不思議な縁を感じます」、「学生時代に何度も立ったベートーヴェンホールに再び立てて、とても誇りに思います」といったコメントを寄せてくれました。

さらに今回の演奏会では本学の在学生11名も賛助出演し、プロと共演するという貴重な経験を積むことができました。参加した学生は、「バルトークを本場のオーケストラと一緒に演奏でき光栄です」、「メンバーの自主性、そしてとても自由な雰囲気を

感じました」、「指揮者に付いていくだけでなく、自分たちで色々作り上げていくのがプロだと実感しました」、「この素晴らしい経験を今後に活かしたい」等々の感想を語ってくれました。

そしてアンコール曲は、まさにハンガリー尽くしの演奏会のラストを飾るにふさわしいブラームス「ハンガリー舞曲 第1番」。熱演が終わると同時に客席から「ブラボー」の声が飛び交い、盛大な拍手が送られました。日本とハンガリー、武蔵野とジュール・フィル——音楽という言葉を通じて、友好の絆がさらに強まる一夜となりました。

武蔵野音楽大学 管弦楽団合唱団演奏会

12月4日、東京芸術劇場 コンサートホールでの管弦楽団合唱団演奏会も本学園創立90周年記念の一環として開催されました。今回は指揮者に仙台フィルハーモニー管弦楽団の常任指揮者で、新国立劇場の第6代オペラ芸術監督を務められた飯守泰次郎氏を招聘し、プログラムはベートーヴェンの大曲「荘厳ミサ曲 ニ長調 Op.123」（合唱指揮：栗山文昭教授、片山みゆき講師）。ソリストには、いずれも武蔵野の卒業生であり、それぞれが既に国内外で目覚ましい活躍をしている森谷真理（ソプラノ）、鳥谷尚子（アルト）、青地英幸（テノール）、三戸大久（バス）の4氏が務めました。

ますます円熟味を増した巨匠のタク

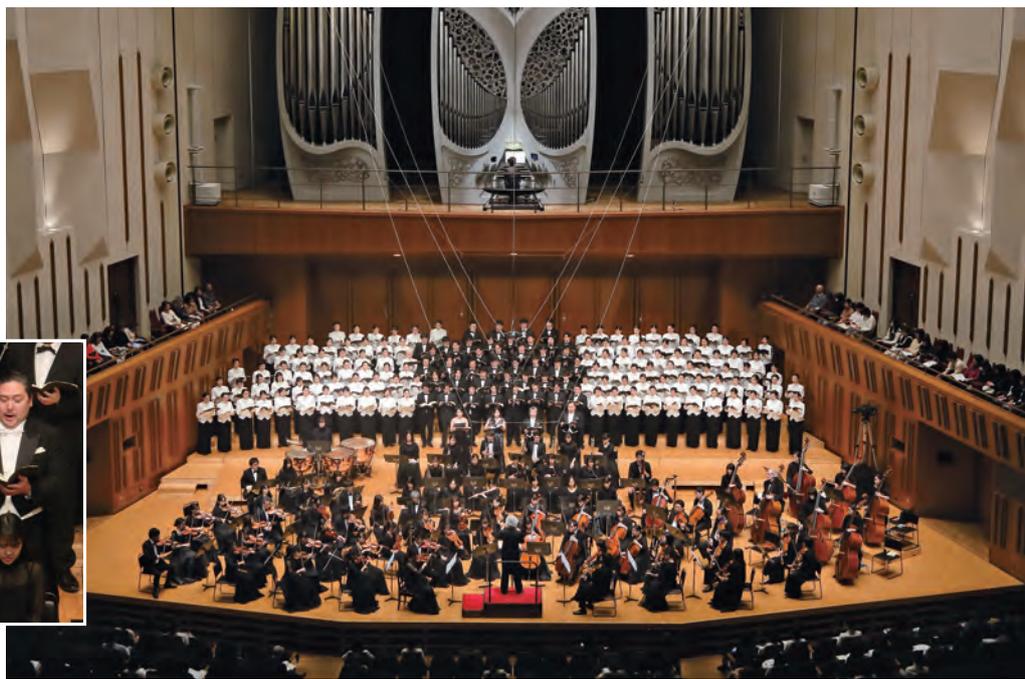
ト、新進気鋭の華やかで伸びやかな歌声、そしてこの日のために研鑽を積んできた本学学生の熱のこもった演奏、その三者が見事なコラボレーションを披露。ベートーヴェンが長い年月をかけて書き上げた大宗教曲を、そのタイトルの通り荘厳かつ重厚感たっぷりに客席にとどけ、終了後には会場から熱烈な拍手が鳴り止みませんでした。



▲飯守泰次郎氏



▲左から森谷真理氏、鳥谷尚子氏、青地英幸氏、三戸大久氏



令和元年度後期を飾った演奏会&公開講座

❖ ペテル・ミハリツァ ヴァイオリン公開レッスン

(10月4日、モーツァルトホール①)

ミハリツァ氏はシェリングやシュナイダーハンの流れを汲むチェコ・スロヴァキアを代表するヴァイオリニストで、チェコ国立ヤナーチェク音楽芸術アカデミー教授を務めています。

当日は本学学生3名が受講し、ブラームス、モーツァルトのコンチェルトについて指導を受けました。音楽の解釈や身体の使い方など具体的なアドバイスにより、学生たちの演奏が変わっていく様子を、満席の聴衆は真剣にみつめていました。さらに氏は、音楽芸術や教育についても哲学的に語られ、レクチャーの最後には演奏を披露し、その人柄がにじみ出た美しく温かい響きが会場を満たしました。(通訳:後藤博亮氏 本学卒業生、チェコ国立ブルノフィルハーモニー管弦楽団ヴァイオリン奏者)

❖ 武蔵野音楽学園創立90周年記念 ミハヤエル・ラーデンプルガー 特別公開講座

(11月6日、ブラームスホール②)

「ベートーヴェンのピアノ協奏曲—成立と歴史と同時代の演奏実践—」をテーマに解説された、ボン・ベートーヴェン・ハウス元館長のラーデンプルガー博士。

当時の演奏会の状況やベートーヴェンの耳の疾患を踏まえた上で、

ピアノ協奏曲やそこに書かれたカデンツァの性格や重要性を資料価値の高い自筆譜等をプロジェクターで提示し、カデンツァ部分を中心に本学教員ならびに学生による演奏を交えつつ示されました。学術的に説得力に満ちた興味深い内容に、聴講者は熱心に耳を傾けました。(通訳:寺本まり子 本学特任教授)

❖ 林 明慧 ピアノ・リサイタル

(11月7日、ブラームスホール③)

世界各国で演奏活動やマスタークラスを行うなど台湾を代表する音楽家であり、国立台湾師範大学音楽学部教授でもある林 明慧女史。この日の演奏会では祖国の作曲家の小品による親密な語りかけに始まり、確かな構成感によるベートーヴェンのソナタ、悲劇性をもつブラームスの変奏曲が、陰影の巧みさをもって演奏されました。後半にはシューベルト最後の長大なソナタ変ロ長調を共感をもって熱演され、女史が奏でる美しく温かい音色に熱い拍手が鳴り止みませんでした。

❖ 室内合唱団演奏会

(11月20日、ベートーヴェンホール④)

指揮を栗山文昭本学教授と片山みゆき



本学講師が務め、プログラムの前半はグレゴリオ聖歌からルネサンス作品、古典派から近代まで、幅広い年代の珠玉の作品が歌われました。透明感あふれる繊細なハーモニーが響き、会場では涙を浮かべながら聴き入る聴衆も見受けられました。後半は寺嶋陸也「混声合唱、2台のピアノと三線のための《沖縄のスケッチ》」を照明や衣装にもこだわり、太鼓、2台ピアノ、三線の響きをのせ上演しました。(演出:しままなぶ氏/照明:林高士氏/三線:鶴見幸代女史)。

会場に作曲者の寺嶋氏をお招きし、出演者は学園創立90周年のお祝いの気持ちを込めつつ、沖縄民謡をもとに作られたこの曲を華やかにエネルギーに歌い踊りました。会場全体が高揚感に包まれ、成功裏に終演しました。

❖ イリヤ・イーティン ピアノ・リサイタル

(11月27日、ベートーヴェンホール⑤)

本学客員教授として就任9年目となるイリヤ・イーティン氏が、完璧なテク





ドフの「オルゴール」が美しい響きで奏でられ、会場は微笑みと喝采に包まれました。

❁ ウィンドアンサンブル演奏会

(12月12日、東京芸術劇場

コンサートホール⑥)

指揮者には2013年以来3度目の着任となる米国ヴァージニア・コモンウェルス大学教授、バンドディレクターのテリー・オースティン氏を招聘しました。P.ミーキャン「ソング・オブ・ホープ」、J.マッキー「ナイト・オン・ファイア」、J.M.スティーヴンソン「交響曲 第2番

〈ヴォイセズ〉(日本初演)など吹奏楽のオリジナル作品を中心に多彩なプログラムを披露しました。

作曲者の意図する音楽を巧みに表現しつつ、温かく深みのある武蔵野サウンドと迫力のある打楽器のコラボで聴衆を魅了し、令和元年度演奏会シリーズを華やかに締めくくりました。

ニックと無限に広がる想像力の調和による名演を展開。プログラムは祖国の作曲家の作品を取り上げ、前半のメトネル「忘れられた調べ」では、各々の題名の性格が表情豊かに描写され、そして後半のプロコフィエフ「ピアノ・ソナタ第6番」では、広大なダイナミックレンジと共に鬼気迫る演奏が聴かれました。アンコールは、ショパン「ワルツ」の後にリチャー

街に活気を！ 江古田駅に本学のピアノを設置

西武鉄道と江古田駅周辺の3大学(武蔵野音楽大学、日本大学芸術学部、武蔵大学)が連携する「江古田キャンバスプロジェクト」の一環として、江古田駅構内に本学のピアノが設置されました。

本プロジェクトは江古田の街全体を一つのキャンバスに見立て、音楽やアート、カルチャーなどを自由な発想・表現で彩り、人と人、人と街をつなぐために発足されたもので、去る10月19日、ピアノのお披露目セレモニーが行われました。オープニングミニコンサートでは、本学大学院ヴィルトゥオーゾコースの古市明里さんが、バルトーク「ルーマニア民族舞曲」を演奏し、開幕に華を添えました。



栄冠おめでとう！ (コンクール入賞者等)

- **ブラームス・ピアノ・コンペティション・デトモルト2019 (ドイツ)** (順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの)
第2位入賞、クララ・シューマン賞受賞 木林理絵(平成24年大学ピアノ専攻卒業、本大学院修了)
- **サン・コロバノ国際コンクール(イタリア) オペラ歌唱部門 第2位入賞**
土屋優子(平成22年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)
- **第59回久留島武彦文化賞 個人賞受賞** 吉澤 実(昭和49年大学音楽教育学科フルート専攻卒業)
- **第88回日本音楽コンクール 声楽部門 入選** 奥秋大樹(平成28年大学声楽専攻卒業、本大学院修了)、● **第73回全日本学生音楽コンクール 声楽部門 大学の部 東京大会本選 第1位入賞、全国大会 第2位入賞** 森田枝小莉(平成30年大学声楽専攻卒業、本大学院2年)、● **第52回新報音楽コンクール ピアノ部門 一般の部 第1位入賞、全部門 特賞受賞** 平林咲子(平成31年大学ピアノ専攻卒業、本大学院1年)、● **第19回ショパン学生ピアノコンクール in TOHOKU 大学生部門 金賞、ショパン賞受賞** 神山真莉子(平成30年大学ピアノ専攻卒業、本大学院2年)、● **2019 16th アジア国際音楽コンクール 大学生ピアノ部門 第1位入賞** 古市明里(平成30年大学ピアノ専攻卒業、本大学院2年、附属高校卒業)、● **第3位入賞** 目黒遥菜(大学1年ピアノ専攻)、● **第15回ルーマニア国際音楽コンクール 打楽器部門 第1位入賞、日本ルーマニア音楽協会理事会賞受賞** 星 あゆみ(大学4年打楽器専攻)、● **マリンバ部門 第3位入賞** 浅井香乃(附属高校3年マリンバ専攻)、● **第15回仙台フルートコンクール 一般部門 第1位入賞** 杉村美咲(大学4年フルート専攻)、● **第6回東京国際ピアノコンクール 大学生部門 第1位入賞** 渡辺愛菜(大学4年ピアノ専攻、附属高校卒業)、● **第19回日本フルートコンヴェンション福岡2019コンクール アンサンブルアワード 第2位入賞** 西村 葵(平成24年大学フルート専攻卒業)、● **香川恵理**(平成26年大学フルート専攻卒業)、● **渡辺梨乃**(平成26年大学フルート専攻卒業)、● **第2回日本奏楽コンクール 管楽器部門 大学の部 第2位入賞** 小山功起(大学2年フルート専攻、附属高校卒業)、● **ピアノ部門 高校の部 第3位入賞** 坂本明子(附属高校1年ピアノ専攻)、● **第21回日本演奏家コンクール 木管楽器部門 一般Bの部 第3位入賞(1、2位なし)** 川鍋さなえ(平成12年大学フルート専攻卒業)、● **第20回大阪国際音楽コンクール 民俗楽器部門 第3位入賞** 古家啓史(平成28年大学マリンバ専攻卒業、本大学院修了、附属高校卒業)、● **第27回TIAA全日本作曲家コンクール 室内楽部門 第3位入賞(最高位)** 中村友美(平成31年大学作曲専攻卒業、本大学院1年)

※上記の他多数。大学ウェブサイトをご覧ください。

華やかに令和最初のミューズフェスティバル開催

学生たちの学友会活動の集大成でもある第68回ミューズフェスティバルが、10月25日～27日の3日間にわたり江古田キャンパスにおいて開催されました。今回のテーマは「Infinity」。無限を意味するこの言葉には、過去から受け継いだ伝統を本ミューズフェスティバルに凝縮させ、次代へ引き継ごうという意味を込めています。

初日の前日祭では、クラブ団体によるダンス、ジャズ演奏や様々な仮装をした学生による吹奏楽、オーケストラなどが、華やかなお祭りの雰囲気のなか賑やかに催されました。

2日目からの本祭には、秋空の下、近隣の方々や卒業生、また受験希望

の生徒の方など大変多くの来場者があり、学生たちはホールや教室での演奏や展示で日頃の研鑽の成果を存分に披露しました。またリストプラザにはクラブ団体や楽器会などによる模擬店が軒を連ね、閉店時間まで楽しい雰囲気が続きました。

✿ 入間キャンパスでも「音楽の祭典」

入間キャンパスでは、10月19日・20日、附属高等学校・幼稚園・音楽教室主催による第44回入間ミューズフェスティバルがパッハザールを舞台に開催されました。

附属高等学校の生徒たちは、授業の成果としてウィンドアンサンブル・合唱、ピアノ・管打弦楽器による多彩な演奏をステージで発表しました。この他、1年生はクラスの催し物として縁日「祭」、2・3年生はアンサンブルコンサート、さらに「総合的な学習の時間」に展開している作品研究、美術、華道の展示やダンスの発表を行うなど、充実した2日間となりました。

武蔵野幼稚園では、「ようこそ！む



さしの村へ」をメインテーマに幼稚園ホールで作品展が行われ、子供たちの力作が飾られました。また、パッハザールでは、「音楽鑑賞会」が開催され、入間音楽教室の生徒たちによる演奏が繰り広げられ、訪れた多くのお客様に楽しんでいただきました。



本誌 Vol.127にご登場いただいた、女優でエッセイストの中井貴恵さんが代表を務める『大人と子供のための読みきかせの会』の公演が、11月6日、ベートーヴェンホールに本学附属第一、第二幼稚園の園児とご父兄

親子で楽しんだ『大人と子供のための読みきかせの会』

を招いて行われました。

演目は、いとうひろし作・絵の『だいじょうぶ だいじょうぶ』。主人公のぼくとおじいさん、二人の素敵なふれあいの中で、おじいさんが口にするおまじないのような「だいじょうぶ だいじょうぶ」がこの物語のキーワード。布の貼り絵からなる手作りの大型絵本、中井さんの卓越した語り、そして世界に一つしかない18弦の琴や尺八のやさしい音色が醸し出す世界に、子供も大人も興味津々。静かに見入ったり、音楽に合わせて笑

顔で手拍子を打ったり、物語に魅了される子供たちの様子が印象的でした。

終演後、園児からは「自分のおじいちゃんを思い出した」「おじいちゃんは優しいと思った」、保護者の方からも「素晴らしい音楽と朗読に感動した」「子供と豊かな時間が共有できた」などの感想が聞かれました。「だいじょうぶ だいじょうぶ」という魔法の言葉が一人ひとりの心の中に温かく刻印され、絵本の素晴らしさをあらためて実感したひとときとなりました。

武蔵野音楽学園創立90周年記念寄附金 ご寄附をいただいた方々

学校法人武蔵野音楽学園では、寄附金に対する税額控除制度の恩典が与えられたことに鑑み、教育環境整備基金、福井直秋記念奨学基金並びに演奏活動特別基金の拡充を目的とする寄附金を募集しましたところ、下記の方々よりご寄附をいただきました。ここにご芳名を掲載し、深く感謝の意を表します。

※ご芳名(五十音順)は、令和元年7月1日から9月30日までにご寄附いただいた方々です。それ以降の方々は、次号にて掲載させていただきます。

また勝手ながら掲載区分は当方で決めさせていただきました。何とぞご了承ください。

※本学ウェブサイトからも、クレジットカード決済によりご寄附のお手続きができます。是非ご利用ください。

【同窓生】 會津育子様 秋山紀夫様 阿部郁子様 飯沼三枝子様 伊藤菊子様 稲垣啓子様 上田一江様 大川理奈子様 大坪亮子様 大山喬子様 柿沼晴吾様 川谷登喜子様 衣川斗美子様 木下達也様 櫛谷慶子様 熊坂良雄様 久米泰好様 菅原由美子様 杉浦博英様 竹内登美子様 田中路恵様 中野久賀子様 鍋田和子様 林 秀樹様 本田 康様 松本和子様 水野雅子様 村上容枝様 吉海江令子様 崔 哲軍様 同窓会埼玉県支部様 平成17年度入学生卒業10周年同期会同期生一同様

【在学生・同ご父母】 明石邦彦様 荒木将司様 飯作盛志様 池谷勝之様 石川めぐみ様 伊勢福修司様 江川泰由様 大友博昭様 景浦かおり様 坂本智喜様 庄司 修様 巽 保夫様 寺崎敬子様 中島更正様 中野 実様 藤原直美様 三嶋由紀様 目黒 豊様

【役員・教職員・一般・他】 上原 明様 佐々木亜紀様 佐藤しのぶ様 関根弘美様 中田淳子様 平山百合子様 福井直敬様 横地千鶴子様 吉田香織様 林 明慧様 (他に匿名を希望される方24名)

令和2年度 入学試験日程のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士後期課程)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
大学院博士後期課程入試	令和2年2月13日④消印 ～20日④消印	郵送のみ	令和2年 3月8日⑤・9日⑤

武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
1年次 一般入試 A日程	令和2年1月16日④消印 ～30日④消印	令和2年1月30日④	令和2年 2月18日⑤～22日⑤
1年次 一般入試 B日程	令和2年2月21日④消印 ～29日④必着	令和2年3月2日⑤	令和2年 3月5日⑤～7日⑤
1年次 一般入試 C日程	令和2年3月5日④消印 ～12日④必着	令和2年3月13日⑤	令和2年 3月16日⑤～18日⑤
3年次 編・転入学入試	令和2年1月16日④消印 ～23日④消印	郵送のみ	令和2年 2月10日⑤・11日⑤(火)

●一般入試A日程およびB・C日程の受験では、国語・英語・ドイツ語・フランス語について、大学入試センター試験の成績を利用できます。

入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。

武蔵野音楽大学(別科)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
別科入試	令和2年1月16日④消印 ～23日④消印	郵送のみ	令和2年 2月11日(火)・12日④

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

	出願期間		試験期間
	郵送	窓口	
附属高等学校 推薦入試	令和2年1月9日④ ～16日④必着	郵送のみ	令和2年1月22日④ ※入間キャンパスにて実施
附属高等学校 一般入試A	令和2年1月23日④ ～30日④消印	郵送のみ	令和2年2月10日⑤
附属高等学校 一般入試B	令和2年3月2日⑤ ～10日⑤必着	郵送のみ	令和2年3月16日⑤

【会場】武蔵野音楽大学江古田キャンパス(附属高校推薦入試を除く)

【要項請求】各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。郵送をご希望の方には無料でお送りいたしますので、本学ウェブサイトの「資料請求フォーム」からご請求ください。お電話でのお申し込みは、氏名、住所、電話番号、および希望される入学試験要項の種別(附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院、別科)をお知らせください。

【要項請求先】武蔵野音楽大学 広報室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125
本学ウェブサイト <http://www.musashino-music.ac.jp/>



音楽教室(江古田・入間・多摩) 生徒募集のお知らせ

◆受験可能な年齢・学年(令和2年3月末現在)

フレコース	3歳
スタンダードコース	4歳～高等学校2年生
レッスンコース	小学校6年生～高等学校2年生
ソルフェージュコース	4歳～高等学校2年生
受験コース(大学志望)	中学校3年生～高等学校3年生
エクセレンスコース(江古田音楽教室のみ設置)	5歳～高等学校2年生

【前期入室試験】令和2年2月23日⑤ 各音楽教室で実施

※エクセレンスコースは江古田音楽教室で行います。

【願書受付】令和2年2月1日④～2月15日④ ※日曜・月曜・祝日を除く
入室試験の詳細については、令和2年度音楽教室のご案内(生徒募集要項)でご確認ください。要項は各音楽教室で取り扱っております。音楽教室ウェブサイトの資料請求フォームからもご請求いただけます(送料無料)。その他詳細については、下記へお問い合わせください。

■江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 ■入間音楽教室 TEL.04-2932-1111

■多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

音楽教室ウェブサイト http://music_school.musashino-music.ac.jp/

編集後記

昨年は歴史的な改元が行われた年であり、武蔵野にとっても学園創立90周年という節目の年でした。そして今年、2020年は巻頭で紹介のように聖聖ペートルヴェンの生誕250周年、そして56年ぶりに

東京でオリンピック・パラリンピックが開催される記念イヤーです。日々の地道な努力と練習が求められるのはスポーツ選手も演奏家も同じ。努力に勝る天才なし、練習は裏切らない、そんな言葉を胸に一日一日を過ごしたいものです(編)。

袖笙

享保年間頃？ 製作者不詳 日本 全長44cm

新しい時代の幕開けとなった2019年は、新天皇陛下のご即位に伴う儀式がいろいろと執り行われた一年であった。天皇皇后両陛下が国内外に宣明された「即位礼正殿の儀」や「祝賀パレード」など、伝統を守りながらも、必要に応じて令和流に形を改めて厳かに行われたことは、まだ私たちの記憶にも新しいところである。そこで今回は、改元を記念して鳳凰と関係が深い笙についてご紹介する。



▲切手に描かれた鳳凰
特殊切手
「天皇陛下御即位記念」
2019年10月18日発行

古来中国で四神のひとつとして知られる鳳凰は、日本でも瑞兆を示す存在として知られている。笙は、管をシンメトリーに美しく配したその外見が、まるで鳳凰が翼を立てて休む姿に似ていることから、「鳳笙」と呼ばれることもある。中でも袖笙とよばれるこのタイプは、袖の中に入るような小型の笙を意味する。昔は馬上で奏されることもあったようで、木の枝にも触れにくいよう、また移動にも便利な携帯用が作られた。

ところで、一般的に管楽器は、管の長さと言の音が関連しているものだが、この笙という楽器は、管の長さと言の音の高さに全く関連が見られないところが面白い。これは、管の裏側にこっそり開けられた屏上と呼ばれる四角い孔にその秘密があり、屏上の位置によ



て、実質的な管長が定められるからである。このため、外見は鳳凰を彷彿とさせる美しい配列を形成しつつ、実際には演奏に必要な音の組み合わせなどを考慮した独特の音の配列が可能なのである。また、小型の袖笙においても、音高は通常の笙と変わりはない。

写真の楽器は、節を美しく揃えた本節で、根継には金蒔絵が、また匏の上面及び側面には撫子が平蒔絵で美しく描かれている。

(武蔵野音楽大学楽器ミュージアム所蔵)

❖目次❖

謹賀新年	1
福井直敬	
ベートーヴェンの記念年に寄せて	2
ミハエル・ラーデンプルガー	
音楽の万華鏡	5
五節舞 藤田治子	
江古田新キャンパス探訪①	6
リストプラザ	
Campus Eye	9
武蔵野音楽学園創立90周年記念イベント開催報告	
MUSASHINO NEWS	11
❖令和元年度後期を飾った演奏会&公開講座	
❖街に活気を！江古田駅に本学のピアノを設置	
❖栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）	
❖華やかに令和最初のミューズフェスティバル開催	
❖親子で楽しんだ『大人と子供のための読みきかせの会』	
❖武蔵野音楽学園創立90周年記念寄附金 ご寄附をいただいた方々	
❖令和2年度 入学試験日程のお知らせ	
❖音楽教室(江古田・入間・多摩)生徒募集のお知らせ	

武蔵野音楽大学大学院
博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学
武蔵野音楽大学別科
武蔵野音楽大学附属高等学校
武蔵野音楽大学第一幼稚園
武蔵野音楽大学第二幼稚園
武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園
附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❖発行❖

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1
TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728
TEL.04-2932-2111 (代表)

バルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1
TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/> f t g+ i

2020年1月10日発行 通巻第132号